

## 中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館藏 「敦煌文獻」漢文部分敍録補

齋藤智寛

### はじめに

中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館藏「敦煌文獻」は、近年公開の進む中規模の敦煌文獻コレクションの中でもっとも遅く全容が知られたものの一つであって、正確な目録の整備やいわゆる眞偽問題を含めた史料価値の判定が现阶段での急務であろう。これについては、すでに鄭阿財「臺北中研院傅斯年圖書館藏敦煌卷子題記」<sup>1</sup>、および「傅斯年圖書館敦煌文獻網站」<sup>2</sup>によって目録の作成や入手経路の検討がなされており有益であるが、部分的には補訂も必要である。そこで拙稿では、これらの成果を基礎としながら寫本の内容と來歴について若干の新知見を提供し將來の議論にそなえることとしたい。敦煌文書の眞實判定については、内容からする方法、入手経路からする方法、料紙や字體などを検討する寫本學的方法などがあり最終的にはそれら諸要素を総合して判断すべきであるが、拙稿はおもに前二者についての検討ということになる<sup>3</sup>。

### 一、傳圖藏「敦煌文獻」概観

傅斯年圖書館では現在 49 點の「敦煌文獻」を藏しており、その内譯は漢文 36 點、西藏文 9 點、西夏文 1 點、回鶻文 1 點、佛像卷子 2 點である。ただし、「回鶻文 1 點」とは回鶻文『華嚴經』といくつかの回鶻文および漢文の小斷片を貼りつけたファイルをまとめて 1 點に数えているのであって、嚴密な點數はもっと多くなる。その來歴は題跋や檔案資料から推測できる例もあるものの過半は明らかでない。しかも、西夏文文獻（『六祖壇經』）がすくなくとも藏經洞の封藏品でないのは論を待たないし、回鶻文文獻についても、整理ファイルには「唐寫本？」<sup>4</sup>との書き込みがあるが Web サイトでは 13 世紀の寫本と推定されており、後者が正しければこれも藏經洞出土の寫本ではない。Web サイトにおいて「後設資料

<sup>1</sup> 『吳其昱先生八秩華誕敦煌學特刊』1999 年 6 月。以下、「鄭目」と略す。

<sup>2</sup> <http://lib.ihp.sinica.edu.tw/rare/dunhuang/index.htm>。以下、たんに「Web サイト」と言えばここを指す。

<sup>3</sup> 寫本學的方法については、藤枝晃、赤尾榮慶らによる一連の仕事があり、赤尾「敦煌寫本の書誌學的研究——近年の動向を踏まえて——」（『日本學・敦煌學・漢文訓讀の新展開』汲古書院、2005 年）に學史がまとめられている。いっぽう榮新江は、眞偽判定法について「その出所や傳承過程を明らかにしたうえで、さらに料紙や藏書印などの外觀について鑑定をおこなうのがもっともよい。そして重要なのは内容から判断することで、その寫本に關連する歴史や典籍の知識によって検討するのである」（『鳴沙集』新文豐出版、1999 年、114-115 頁。『敦煌學十八講』北京大學出版社、2002 年、364 頁）と概括する。

<sup>4</sup> [http://lib.ihp.sinica.edu.tw/rare/dunhuang/metadatahtml/188171/188171\\_a01.htm](http://lib.ihp.sinica.edu.tw/rare/dunhuang/metadatahtml/188171/188171_a01.htm)

(metadata)」の「Site」欄がすべての寫本について「敦煌？」と疑問符をつけ、「館藏簡介」欄がこれらの寫本群を「中古時期的文獻」と總稱するのは、こうした事情を考慮しての慎重な措置であるとおもわれる。

現在、傳圖藏「敦煌文獻」はそのすべての畫像が Web サイトで公開されているほか、The International Dunhuang Project (IDP) のサイトでも漸次公開がすすんでいる<sup>5</sup>。特にことわりのない限り、筆者はこれらインターネット上の畫像にもとづいて考察をすすめている。編號については、Web サイトを標準とし、( ) 内に「鄭目」の編號をおぎなう。たとえば 188074 (23) とあれば、傳圖 188074 號、鄭目 23 號の意である。

## 二、定名

最初に、いくつかの寫本についてより嚴密な定名を提案したい。ただし、ここで取り上げるのは後章で來歴を検討するさい目に付いたものに限られており、その他の寫本に問題がないことを保證するものではない。

### 188074 (23) 節鈔摩訶般若波羅蜜經

「鄭目」は「摩訶般若波羅蜜經卷第十至十九殘卷」、Web サイトは「摩訶般若波羅蜜經」とする。しかし、「鄭目」が「鈔〈佛母品〉首段三十八行、〈願樂品〉尾十二行」と指摘するようにこれは完全な寫經ではなく節略本である。これについて陳垣『敦煌劫後餘録』の「摩訶般若波羅蜜經〔後秦鳩摩羅什譯二十七卷〕」類を閲すると、服 17 (3470)、鹹 (3471)、閏 29 (3472)、閏 37 (3473)、字 26 (3474)、炆 56 (3475) の六種について「摘鈔」であるとの注記がある。陳氏はこれに特別な名稱を與えてはいないが、「燉煌本古逸經論章疏竝古寫經目錄」には「節鈔摩訶般若波羅蜜經 六卷」が著録されており<sup>6</sup>、陳氏の擧げる六卷に對應するものとおもわれる。そこで研究の便宜上、傳圖本にも同じ呼稱を提案したい。

なお、本寫本の首題は「摩訶般若波羅蜜經佛母品第四十七」に作り、中題は「摩訶般若波羅蜜經願樂品第六十三」に作るが、大正藏本ではそれぞれ「佛母品第四十八」(T8、323a)、「淨願品第六十四」(T8、358b) に作っており、調卷と品名に異同がある。これについて「大正新脩大藏經勘同目錄」を参考すると、佛母品については神護景雲二(768)年寫聖語藏本が「第四十七」としており、品名、調卷とも一致する<sup>7</sup>。「願樂品第六十三」はいささか複雑で、元本と唐寫聖語藏は「願樂品」に作るものの品數は第六十四で一致しない。神護景雲寫聖語藏本は品數こそ第六十三で一致するが品名が「願樂隨喜品」であってややことなる<sup>8</sup>。房山石經(唐刻)も「願樂品第六十四」である<sup>9</sup>。だが佛母品の狀況とかがえあわせて、神護景雲寫聖語藏本と同じ配卷のテキストを元にした節略本であると言える。「鄭目」が『摩訶般若波羅蜜經』には二十七卷本、三十卷本、四十卷

<sup>5</sup> <http://idp.bl.uk/>

<sup>6</sup> 「二、北平京師圖書館所藏燉煌寫經總目錄」參照(『法寶總目錄』第一冊、1058c)

<sup>7</sup> 『法寶總目錄』第一冊、209 頁下。

<sup>8</sup> 『法寶總目錄』第一冊、209 頁下。

<sup>9</sup> 『房山石經(隋唐刻經)』2(華夏出版社、2000年)142頁。

本がある。敦煌本は四十卷本である」と按語をつけるのは、こうした事情を指しているであろう。

### 188088 (07) 涅槃經節鈔

「鄭目」は「大般涅槃經卷第十八至廿殘卷」、Web サイトは「大般涅槃經」とする。しかし内容は節略本であるし、尾題にも「要第二」とあって、筆寫者じしんの意識も同様であったとおもわれる。節略の程度はやや思い切ったもので、梵行品を五部分に分けて摘録したのち、嬰兒行品の冒頭 28 行（大正藏でも 28 行分）を抄寫している。以下に大正藏第 12 冊のページ数と行数によって、節録状況を示しておく。

#### 卷第十八梵行品

(首缺)

- 1、「尊不畢竟涅槃是故」(472b14)～「外用名之爲藏」(472b16)
- 2、「善男子大涅槃經常不變易」(472b25-26)～「不畢竟入於涅槃常住無變雖有是典不須演說」(472c1-2)
- 3、「復次善男子若佛初出得阿耨多羅三藐」(473b17)～「當知是法久住於世」(473b22-23)

#### 卷第二十梵行品

- 4、「爾時佛告阿闍世王言大王今當爲汝說正」(483a14)～「恆爲怨家之所追逐无有一法能遮諸有」(483a20-21)
- 5、「大王夫眾生者名出入息斷出入息故名爲煞諸佛隨」(484b18-19)～「而起繞佛三匝辭退還宮天行品者如雜華中說」(485b11-12)

#### 卷第二十嬰兒行品

- 6、「男子云何名爲嬰兒行善男子不能起住」(485b14)～「眞金想使上不啼」(485c12)

本寫本の呼稱についてだが、北京コレクションの中に『涅槃經』の節略本が多数ふくまれており、『敦煌劫餘録』ではこれらに「涅槃經節鈔」の擬題をあたえている<sup>10</sup>。次に述べるように傳圖本は北京諸本ときわめて密接な関係を有しているので、傳圖本についても「涅槃經節鈔」と呼ぶのが適當であろう。

さて、北京本「涅槃經節鈔」諸本の特徴として赤松孝章氏は、①抄出の仕方としては、くり返しや譬喩を省いている、②加點が打たれ、③脱字は小字で追加されている、の三點を挙げるが、これらの特徴は傳圖本にも見ることができる。まず抄出態度であるが、たとえば傳圖本第 8-9 行「不須演說」と「復次善男子」の間には大正藏本にして約 63 行の省略がなされているが、省略箇所には「寧ろ…………と説くとも、如來の法滅すると説言すべからず」という譬喩の反復や

<sup>10</sup> 『敦煌劫餘録』第八帙第三八四葉。なお、赤松孝章「敦煌出土寫本にみる涅槃經傳承の一形態」(『印度學佛教學研究』32-1 [通卷 63] 1983 年 12 月)と陳氏とは、「涅槃經節鈔」とみなす寫本の範圍がことなる。拙稿では赤松氏にしたがい、洪 29 (6601)、鱗 11 (6602)、薑 73 (6603)、鹹 63 (6604)、地 20 (6605)、調 38 (6607)、翔 99 (6608)、雨 86 (6610)、海 7 (6331) の 9 點を「涅槃經節鈔」としてあつかう。

(472c)、さまざまな状況下での佛法の存続可能性を場合分けして列挙分析する一段が含まれており<sup>11</sup>、北京本の特徴に一致する。次に、二十四行目の「夫眾生者」の「夫」字は行傍に小字で加えられており、校勘の跡をのこしている。また全體に朱點がほどこされているのも共通点の一つであるが<sup>12</sup>、傳圖本、北京本ともに明らかな誤りや不適当な斷句がまま見られ、加點の方式、水準までも共有しているのである<sup>13</sup>。加えて、傳圖本尾題の「要第二」と洪 29 (6601) 中題の「大般涅槃經第廿九要略」も、類似のひとつに數えてよいだろう。

また、京都國立博物館所藏守屋孝藏蒐集古寫經の中國部分にも、「涅槃經節鈔」の存在がつとに報告されていた。筆者が實見したところ、全體に朱點がほどこされ、やはり朱筆で校勘がなされるなど傳圖本、北京本と密接な關連を有しているようである。しかしながら傳圖本が高さ 32cm の褐色がかった黄檗紙を用いているのに對して、守屋本は高さ 26.8cm で鮮やかな黄色を残す料紙に書寫されておりすべての點が共通するわけではない<sup>14</sup>。一群の寫本の性格解明にはさらなる検討を要するだろう。

なお、Web サイトの畫像で本寫本を見ると裏打ちの紙の上にまで文字があることにはなはだ困惑するが、現物を閱覽したところ、それらは近人によって鉛筆書きされた文字であることが判明した。以下、冒頭二行の録文をかかげるが、[ ] 内の文字すべてと、□で圍んだ文字の一部が鉛筆による補寫である。

- 1 尊不畢竟涅槃是故〔此經名爲如來祕密之藏〕
- 2 十一部經所不說故故名〔爲藏〕如人七寶不出

同様の鉛筆書きは、筆者が實見したものでは 188106 (10)「圓明論」の冒頭にも存在しており、畫像から判斷する限り 188071 (06)「周易正義」と 188075 (24)「摩訶般若波羅蜜經具足品」の冒頭にもそれらしき部分がある。畫像の利用には注意が必要である。

### 188091 (25) 佛名經 (十六卷本) 卷第五

「鄭目」と Web サイトが指摘するように現行の各種大藏經中には一致するテキストが見出せないが、敦煌文獻や日本の古寫經中には佚書である十六卷本『佛名經』が存在しており、傳圖本はその卷第五にひとまず比定できる。ただし、本卷の現状には問題があるとおもわれるので以下に検討したい。

<sup>11</sup> 「善男子、若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已、未有弟子解甚深義、彼佛世尊便涅槃者、當知是法不久住世。復次善男子、若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提已、有諸弟子解甚深義、佛雖涅槃、當知是法久住於世」(472c) 以下。傳圖本の「復次善男子若佛初出得阿耨多羅三藐三菩提」以下は、この一段の最後の一例にあたる。

<sup>12</sup> 北京本の場合、『敦煌寶藏』の白黒寫眞では判然としないけれども、『敦煌劫餘錄』は鱗 11 (6602)、鹹 63 (6604)、雨 86 (6610) について「中有硃筆圈點」と注記しており、朱點であることがわかる。

<sup>13</sup> 傳圖本では、12 行「長老我親、從諸佛聞如是義」、23 行「恒爲怨家、之所追」などは明白な誤りであろう。北京本からは、洪 29 (6601) が「師子孔、菩薩、摩訶薩言」、「以首楞嚴、三昧力故」のように固有名詞を途中で斷句している例などを挙げうる。

<sup>14</sup> 守屋本については、『守屋孝藏氏蒐集 古經圖録』(京都國立博物館、1964 年)53 頁に解題がある。

いま、傳圖本を七寺藏十六卷本『佛名經』に對照してみると、第1紙第1行「南无天國土佛 南无師子欣聲佛」から第2紙第28行（最終行）「南无善住意菩薩 南无跋陀波羅菩薩」までは七寺本『佛名經』卷第五第531行から第586行に相當するが、第3紙第1行に至ってとつぜん七寺本第54行相當の「南无福德威德佛 南无日佛」が始まり、そのまま錯簡なしに第244行相當の「南无虚空无碍妙音藏菩薩」（後殘缺）までつづいている<sup>15</sup>。そこで第2紙と第3紙の繼ぎ目を觀察すると、ほかの場所では紙縫をまたいで天地の界線がそろっているのがここでは上下にずれており、また第3紙右下に見える茶色の染みが隣接する第2紙左下にはまったく見られないことに氣づく。つまり本卷は一たん二卷以上にはぐれてしまった卷子をおそらくは裱裝のさい再綴合したが、そのとき前後を顛倒してしまったものようである。なお、本卷において逸してしまった部分、すなわち七寺本第255行から第530行相當部分の存否は筆者未調査である。

この十六卷本『佛名經』については、井ノ口泰淳「敦煌本「佛名經」の諸系統」<sup>16</sup>、方廣錫「關於敦煌遺書『佛說佛名經』」<sup>17</sup>、眞柄和人「『佛說佛名經』（十六卷本）解題」<sup>18</sup>が參考になる。

## 188104 (30) 維摩手記

### (a. 維摩手記、b. 押座文、V. a. 大般若波羅蜜多經目錄、b. 維摩手記雜寫、c. 賢愚經云（十夢）、d. 佛教教理雜寫）

「鄭目」、Web サイトともに「維摩手記」と題する。この定名は紙背に記された外題にもとづきかつ正面の内容は『維摩經』の注釋であるとみとめられるので、寫本全體の呼稱としては妥當であろう。ここでは、やや複雑な寫本の構成をより詳しく明らかにしたい。

まず正面について、「鄭目」も Web サイトも第8紙最終行の「前三即是福門若行發後五即屬惠門」を寫本正面の最終行としているが、寫眞を見る限りさらに第9紙が繼がれて5行分の文字が見える<sup>19</sup>。以下、句讀をほどこして録文をかかげる（判讀不能の字は「□」で代用した）。

- 1 此會道、難可遇、今日佛法亦難逢。猶
- 2 如嬰□失慈母、啼聲硬啞痛傷人。勸請道場
- 3 祈光衆<sup>20</sup>、誓碎軀命不留身。
- 4 末法衆生无福惠、昏昏只解□无明。競起
- 5 貪瞋緣妄想、俱將我慢事縱橫。

<sup>15</sup> 七寺本は、牧田諦亮監修『七寺古逸經典研究叢書第三卷 中國撰述經典（其之三）』（大東出版社、1995年）所収の影印と録文によった。

<sup>16</sup> 『中央アジアの言語と佛教』（法藏館、1995年）所収。本論文では、敦煌本『十六卷佛名經』の一覧が作成されたいへん有益である。井ノ口氏が列挙するテキストの他、京都國立博物館所藏守屋コレクション『佛說佛名經』のマイクロ焼付寫眞を檢討した結果、これも十六卷本であることが判明した。守屋本は、七寺本の1行目から443行目「南无世間自在王佛」までと557行目「南无呪陀經」から647行目（卷末）までに對應している。

<sup>17</sup> 『敦煌學佛教學論叢（下）』（中國佛教文化出版有限公司、1998年）

<sup>18</sup> 注15前掲書。

<sup>19</sup> 「鄭目」の引く『傳斯年圖書館藏目錄』は寫本全體を8紙としているが、おそらく第1紙正面に文字がないのを數えない數え方であろう。

<sup>20</sup> 「光衆」の語義未詳。「廣衆」などの誤りか。

問題となるのはこの部分と「維摩手記」との関係である。まずかんがえうるのは、「維摩手記」はじつは講經文の形式を取っており、散文と七言偈とが交互にあらわれる作品であったということである。だがこの第9紙は第8紙までに比べて大ぶりでありさらに崩れた書體で書かれ、墨色もやや淡く、おそらく一手ではあろうが一時に書かれたものではない。したがって、この偈頌を完全に「維摩手記」の一部とみなすのには躊躇をおぼえる。より高い可能性としては、「維摩手記」の講義にあたって唱えられた押座文か解座文の類であろうと推測しうるだろう。いま、「道場を勧請し」云々とはこれから講經を開始するさいの口吻であると見て、「押座文」の擬題をつけてみた。

ついで紙背を考察する。「鄭目」と Web サイトは、その内容を『傳斯年圖書館藏目録』にもとづいて「大般若波羅蜜多經緣起品第一之一至教誡教授品第七之十目録及賢愚經」とする。このうち、「大般若經目録」については問題ないが、「賢愚經」については再考を要する。この部分の内容は、過去迦葉佛の時代に國王が見た十種の夢が釋迦牟尼佛滅後の末法の世を豫言していたというものだが、梁麗玲『《賢愚經》研究』が指摘するように現行『賢愚經』には一致する文が見えないし、この部分の冒頭は「賢愚經云」と始まり、抄寫者（張大慶？）じしん『賢愚經』の寫經をした意識はないのである。

こうした現行本との不一致について、『《賢愚經》研究』では他の經典の誤寫なのか散逸した異本『賢愚經』なのかは今後の研究に待つと結論が保留されていたが<sup>21</sup>、その後、梁氏は傳圖本と P2668 とがほぼ同系統のテキストであることを発見し、傳圖本の「賢愚經云」四字は抄寫者の誤りであろうと結論している。そして梁氏は、これらを「十夢經」の擬題をもって呼ぶことを提案しているのである<sup>22</sup>。

さて、現行『賢愚經』との不一致および P2668 との一致を見出した梁氏の功績は大きい。しかし「賢愚經云」四字を誤寫とみなし、「十夢經」と定名することには躊躇をおぼえる。『賢愚經』には異本が多いうえ早くに散逸した部分もあると言われており<sup>23</sup>、梁氏がいったんは念頭におきながら斥けた失傳異本説も依然として可能性を残しているのである。また、類書などから孫引きした可能性もあるだろう<sup>24</sup>。いずれにせよ、もし筆寫者の誤りではなく確信をもって「賢愚經云」と記されているのならば、われわれの擬題にはその事実が反映されなければならない。今は、筆寫者の意識と内容の兩者を生かして「賢愚經云（十夢）」とでもしておくほかないであろう。ただし、これは敦煌文書における目録のあり方一般にも関わる問題なので、大方のご叱正を乞いたい。なお、梁氏はここに「十夢」が書寫された理由について、占卜に長じた張大慶が夢占いのために筆寫した可能性を指摘している。

<sup>21</sup> 『《賢愚經》研究』（法鼓文化事業股份有限公司、2002年）64頁。

<sup>22</sup> 「敦煌寫本《十夢經》初探」（『“轉型期的敦煌學——繼承與發展”國際學術檢討會論文集』南京師範大學、2006年9月7-11日）。本會議の正式な論文集は2007年7月以降出版予定ということであるが、締切の関係で拙稿では會議当日に配布の論文集に依る。未定稿の引用をご許可くださった梁麗玲氏に感謝申し上げます。

<sup>23</sup> 松本文三郎『敦煌本大雲經と賢愚經』（『佛典の研究』丙午出版社、1914年）

<sup>24</sup> 傳圖本の内容は、『經律異相』卷第三十四「王女摩闍尼爲婆羅門所嫉」があるていど共通する。

次に、本寫本には「大般若經目錄」と「賢愚經云」の間に1行、「賢愚經云」の後に3行、未比定の文字が残されており、解決を要する。

まず、先の1行とは「從法王命宗即從佛國二至目淨偈末是名半品」の19字である（「大般若目錄」などとは上下逆向きに書寫される）。これについては、道液『淨名經集解關中疏』が理解の手掛かりになる。『關中疏』における『維摩經』の科段は、佛國品の冒頭から「目淨修廣如青蓮」に始まる偈頌の終わりまでを序分、佛國品後半から見阿闍佛品までを正宗分、法供養品と囑累品とを流通分としており<sup>25</sup>、正宗分の始まりである佛國品後半を「法王命宗」としている<sup>26</sup>。問題の一行にも「法王命宗」、「佛國二（「一」の誤りか）、「目淨偈」、「半品」といった用語が見えているから、これも『維摩經』の科段を述べたものであって、おそらくは「維摩手記」の一部かそれに關連する覺書きと推測しうる。ひとまずは、「維摩手記雜寫」と呼んでおきたい。

「賢愚經云」の後に書寫された3行については「敦煌寫本《十夢經》初探」がすでに録文を作成しているが、あえてここに再掲する。

- 1 合爲一蓋。貪以可愛境爲食、不淨觀治。嗔以不可愛境爲食、慈悲觀治。睡眠以嘔
- 2 呻缺呿爲食、用毘鉢舍那爲治。掉悔以尋伺爲食、用奢摩他爲治。疑以三世
- 3 境爲食、用十二因緣爲治。

内容としては、貪、瞋、睡眠、掉悔、疑の五蓋について、それぞれを増長させることがら（食）と除去するための修行法（治）とを述べたものである。最初の一句「合爲一蓋」はこれのみでは意味をなさず、ほんらいはそれ以前にも文字があって「昏沈と睡眠、掉擧と惡作はそれぞれまとめて一つの蓋となる」といった内容の文になるはずである。したがってこの3行は何らかのより長い文からの抜き書きとかんがえられる。現行大藏經中の經論では玄奘譯『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第四十八「結蘊第二中不善納息第一之三」などが同内容であるが<sup>27</sup>、表現まで一致するものを見ない。論疏や教理綱要書からの抜粹とみて、「佛教教理雜寫」とでも名づけるほかないであろう。

なお、正面に筆寫された「維摩手記」では經文「永離蓋纏」の解釋で五蓋を解説しており（第99行－第104行）、背面の雜寫は張大慶がこの問題について他書

<sup>25</sup> 佛國品疏の冒頭に云う、「然十四品經、大分三別。初此品半、爲未信令信、故名序分。次十一品半、信已令悟、故名正宗分。三後二品盡經、悟已應傳、名流通分」（T85、441b）と。

<sup>26</sup> 「爾時長者子寶積、說此偈已白佛言、世尊、是五百長者子、皆已發阿耨多羅三藐三菩提心」疏に云う、「此下明正宗、前序分既合蓋駭心、讚揚信發故、此當根啟悟、證果獲益。文三、初佛國半品、法王命宗。二方便下九品、大士助佛揚化。三菩薩行・見阿闍二品、宣揚事訖、還歸印定。如王宣正令、大臣行事、事訖朝尊之類也」（T85、447c）と。

<sup>27</sup> 此中一食一對治者、謂貪欲蓋以淨妙相爲食、不淨觀爲對治、由此一食一對治故、別立一蓋。瞋恚蓋以可憎相爲食、慈觀爲對治、由此一食一對治故、別立一蓋。疑蓋以三世相爲食、緣起觀爲對治、由此一食一對治故、別立一蓋。昏沈睡眠蓋、以五法爲食、一瞢憤、二不樂、三頻欠、四食不平性、五心羸劣性、以毘鉢舍那爲對治、由此同食同對治故、共立一蓋。掉擧惡作蓋、以四法爲食、一親里尋、二國土尋、三不死尋、四念昔樂事、以奢摩他爲對治。由此同食同對治故、共立一蓋。（T27、250bc）

の記事を移録したノートとかんがえられる。また、この「雑寫」には「可愛境」、「不可愛境」、「尋伺」など玄奘譯に特徴的な術語が集中的にあられる。寫本正面の「維摩手記」でも、「若依『无垢稱』」（第 58 行）という形で玄奘譯『説無垢稱經』の異文を参照する箇所があり、おなじく玄奘譯『大般若經』の目録を筆寫することとあわせて、張大慶の周圍でおこなわれていた佛學を彷彿させる。

### 188105 (31) 維摩經科文等小抄

(a. 維摩經科文、b. 河西節度使道場文、c. 和菩薩戒文雜寫、V. 和菩薩戒文)

「鄭目」は「維摩釋前等小抄」、Web サイトは「維摩經釋前等小抄」と題しており、いまその意を測るに、本寫本の冒頭にある「將釋此經文前」六字に注目して「維摩疏釋前小序抄」（大正藏 85）と同類の寫本と判断したものとおもわれる。「維摩疏釋前小序抄」とは道液序と僧肇序（ともに『淨名經集解關中疏』冒頭に収録）の注釋であるが、果たして本寫本も同じ内容であるか否か、以下に検討したい。まず、冒頭 2 行の録文と譯をかかげる。

- 1 將釋此經文前、初以三門分別。第一、天台五義。第二、
- 2 今古兩序。第三、正釋經文。就此第三釋正文之中、
- 3 然十四品經、大分三別。初此佛國半品、爲未信令

（この經文を解釋する前に、まずは三部門に分ける。第一は、天台智顛の提唱した「釋名」、「出體」、「明宗」、「辨力用」、「判教相」の五つの角度からの解説<sup>28</sup>、第二は、僧肇の舊序と道液の新序、第三に本文としての經文を解釋する。

この第三の本文の解釋においては、この十四品の經典は、大きく三部に分けることができる。はじめはこの佛國品の前半であり、いまだ信じない者のために……………)

こうして見れば、「將釋此經文前」が「經文の前の序文を解釋する」という意味でないことは明らかであろう。そして、3 行目からはただちに經文の科段へと移っていることからわかるように、本寫本は『維摩經』佛國品第一から文殊師利問疾品第五までの科段を記したものであって、「維摩疏釋前小序抄」とは別内容の資料なのである。

さて、録文の 3 行目を見ればこれが注 25 に引用した『淨名經集解關中疏』佛國品疏の文であることは一目瞭然であるが、じつは本作品は、一部の段落の書き出しが独自の文であるほかは<sup>29</sup>、すべて『關中疏』から科段に関する文を摘録したものである。したがって本作品は「淨名經集解關中疏科文」とでも呼ぶことができそうであるが、『關中疏』には「天台五義」にあたる部分が含まれないことから曖昧に「維摩經科文」としておき、寫本全體は舊題をも尊重して「維摩經科文等小抄」と呼ぶことを提案したい。

この「維摩經科文」は第 29 行目で終わり、第 30 行からは道場文が筆寫される。

<sup>28</sup> 『維摩經玄疏』卷第一（T38、519a）

<sup>29</sup> 冒頭の 2 行のほか、第 8 行「上來惣相序竟」、第 12 行「初第一法王命宗」、第 13-14 行「次明請問」、第 23-24 行「此第二訶聲聞菩薩」、第 25-27 行「上來惣明室外三品竟、此二明室撰受六品經文。初文殊品、中文二」。

その内容は河西節度使の武運長久を祈るものようであるから、Web サイトによる「河西節度使道場文」という擬題はまことにふさわしいものであろう。ただし「鄭目」も Web サイトも指摘しないが、この「道場文」は第 42 行第 4 字で終わっており、第 42 行第 5 字から第 44 行（正面最終行）までは別内容の文字が筆寫されているのである。それは「心渴仰專注法音。惟願戒師、慈悲廣説。諸菩薩、莫斃生。斃生必當墮火坑」二十九文字だが、これはほぼ『和菩薩戒文』（大正藏 85）の冒頭に對應する。そこでこの部分は「和菩薩戒文雜寫」と呼ぶのが適當であろう。

ついで背面の検討に移るが、じつはこの背面は、正面の最後に筆寫された「心渴仰專注法音」云々に始まり、「佛子諸菩薩、莫毀他。毀他相將入奈河、刀劍縱横、從後」までで、『和菩薩戒文』の冒頭から不毀他戒の段までに相當するのである。つまり、本寫本の筆寫者は正面に『和菩薩戒文』を寫し始めたものの 3 行目で中斷し、改めて背面に書き始め、しかしどういふわけかそれも途中で放棄したのである。

この背面の定名にかんしては「鄭目」、Web サイトともに「戒師廣説戒文」としている。しかし研究の便宜のためには、學界により定着している「和菩薩戒文」に改めるのが良いかとおもわれる。

#### 188106 (10) 圓明論 (a. 圓明論、b. 阿摩羅識、c. 七言)

「鄭目」、Web サイトともに「圓明論」とするが、より詳しくみれば本卷には「圓明論」のほか別作品が 2 種連寫されている。まず、「圓明論一卷」なる尾題の次行「阿摩羅識、此云、无垢清淨識也」から「且略陳梗概而已」まで 42 行にわたって標題不明の文章が筆寫されている。これについては、同一の文章が P3559+P3664 と石井本においても「圓明論」に續いて連寫されており<sup>30</sup>、田中良昭氏にしたがい冒頭の 4 字をとって「阿摩羅識」と呼ぶのが適當であろう<sup>31</sup>。傳圖本はペリオ本や石井本と近い系統の寫本ということになるが、しかし「阿摩羅識」に續いて筆寫される七言偈は、傳圖本独自の要素である。以下に録文をかかげたい。

- |   |    |                            |
|---|----|----------------------------|
| 1 | 七言 | 漸頓門中方便説、只爲衆生見淺深。必解圓門无相     |
| 2 |    | 理、何須逃逝速求金。求金覓濟貧窮苦、展轉生死何能   |
| 3 |    | 度。□□□疏逐文相、單守自心真正路。正路攸攸空眇漠、 |
| 4 |    | 緣中□□无有錯。五百天王深我淨、轉輪千子恆常樂。   |
| 5 |    | 某乙本是眞如國之層□□乘清昇究竟郡忙忙性海□     |

以上のように、3 字分ほど擡頭して「七言」なる表題を記し、下に七言の偈頌を筆寫している。この部分は寫本中の題にしたがって「七言」と呼ぶのが適當であろう。偈文の冒頭で「漸門と頓門という方便の説は、ただ衆生の見解の深淺にあわせて設けられただけである。教説を離れた圓門という理を體解すれば、どう

<sup>30</sup> 石井本は筆者未確認だが、田中良昭「圓明論」（『敦煌禪宗文獻の研究』大東出版社、1983 年）に實見にもとづく報告がある。

<sup>31</sup> 田中「圓明論」

してわざわざ焦って黄金（にも見まごう教説）を求める必要があろうか」というのは、「圓明論」末尾で「圓門義」、「圓教之義」、「圓教法門」、「圓教門」などを強調するのに對應するとおもわれ、「阿摩羅識」同様、「圓明論」と密接な連關を持ちつつ流布していた偈頌のようである。あるいは傳圖本の筆寫者じしんが作者であろうか。

なお、本寫本冒頭2行には鉛筆による補寫がある。下にかかげる録文のうち、〔 〕内のすべてと□で圍った文字の一部が鉛筆で書かれている。

- 1 〔所言〕緣者豈不是妄爲  
2 〔此得知是其妄也〕若言心在腹内者亦復不然何以故若在腹内應知腹内五藏

『圓明論』のテキストとしては現在、「鄭目」の挙げる S6187、P3559+P3664、北 7254（服 6）、石井光雄舊藏本のほか、Dx696 を加えた計 6 種が知られている<sup>32</sup>。研究も特にペリオ本とスタイン本の發見紹介くらい大幅な進展があり、現在では以下の諸研究を参照することが必要である。

- ①岡部和雄「禪僧の注抄と疑偽經典」（『敦煌佛典と禪』大東出版社、1980 年）
- ②田中良昭「圓明論」（『敦煌禪宗文獻の研究』大東出版社、1983）
- ③ John R. McRae, *The Northern School and the Formation of Early Ch'an Buddhism*, University of Hawaii Press, 1986
- ④柳田聖山「傳法寶紀とその作者 ペリオ第三五五九號文書をめぐる北宗禪研究資料の札記、その一」（『禪佛教の研究』法藏館、1999 年）
- ⑤程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」（『禪學研究』83、2005 年 1 月）

このうち田中論文は、従来誤解されていた『圓明論』本文の範圍をスタイン本の検討にもとづいて確定した畫期的業績である。McRae 著には本作品についての研究と校訂本が収録されている。

### 三、舊藏者

以上はおもに内容面からの検討であったが、以下に寫本の來歴について考察する。まず本節では、舊藏者について再検討をおこなう。「鄭目」によれば題跋や藏書印によって判明している傳圖本の舊藏者には、虞維疆（鄭 03「佛說慧上菩薩經上」<sup>33</sup>、啓功（鄭 05「優婆塞戒經卷第三」、鄭 21「妙法蓮華經妙音菩薩品」）、周樹模（鄭 09「四分律卷第一」）、吳寶燁（鄭 17「大般涅槃經卷第二十五」、鄭 28「法華義記第一」）、許承堯および吳博全（鄭 49「隨求即得大自在陀羅尼神呪經」）の 6 人がいる。ここでは「鄭目」以後の研究によって、ほかの手掛かりによって推定しうるケースを 2 例紹介したい。

<sup>32</sup> 程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」（『禪學研究』83、2005 年 1 月）

<sup>33</sup> 虞維疆について「鄭目」は特に説明をくわえていないが、姓が「龔」であれば龔維疆（字郅初）なる人物がいる。外務省情報部『現代中華民國滿洲帝國人名鑑』（東亞同文會、1937 年）106-107 頁參照。

(1) 李盛鐸：188071 (06)「周易正義」

188071 (06)「周易正義」には題跋、藏書印のたぐいがなんら付されていない。しかし許建平氏によれば、羅振玉が李盛鐸邸で見た敦煌卷子を挙げる中に『周易』單疏(賁卦)が見出され、李氏舊藏本と断定できるのである<sup>34</sup>。李盛鐸舊藏敦煌寫本の諸目録に本巻の名は見えないが<sup>35</sup>、羅振玉の證言と矛盾なく理解するなら目録記載のほかにも一定量の寫本が存在していたことになるだろう<sup>36</sup>。その流出過程は明らかでないが、史語所の入手経路については、日中戦争後に北平で購入したと黄彰健氏が記している<sup>37</sup>。じしん史語所の研究員である黄氏の言葉だけに信頼性の高い證言であるが、惜しむらくは具体的な年次や購入店名は伝えられていない。後述のように1948年から1949年にかけて北平慶雲堂から購入した寫本が李氏舊藏とされるが、しかし現存する領收書類には本寫本の名が見えず、關連は不明である。

この寫本については、1971年5月付の『大陸雜誌』第42卷第9期に早くも書影が掲載されている<sup>38</sup>。さらに同年11月にもものされた蘇瑩輝「略論五經正義的原本格式及其標記經、傳、注文起訖情形」では、現物を調査した結果として「その紙の厚さは敦煌出土の一般的な唐五代卷子に及ばず、色あいも初・盛唐寫本には似ない。しかし書體から言えば、五代より下ることはできないようである」との所見が述べられている<sup>39</sup>。本巻は、傳圖藏「敦煌文獻」の中でもその來歴が比較的あきらかで、しかももっとも早くから紹介、研究された寫本と云いうるであろう<sup>40</sup>。

<sup>34</sup> 『敦煌經籍叙録』(中華書局、2006年)58-59頁。「羅振玉致王國維(1919年9月17日)」(『羅振玉王國維往來書信』東方出版社、2000年)。

<sup>35</sup> 王重民『敦煌遺書總目索引』(『敦煌叢刊初集』二、新文豐出版)に「李氏鑑藏燉煌寫本目錄」、「德化李氏出售敦煌寫本目錄」、「李木齋舊藏敦煌名跡目錄(第一部分)」、「同(第二部分)」の四種が収録される。ただし、「李氏鑑藏燉煌寫本目錄」については榮新江「李盛鐸藏敦煌寫卷的眞與偽」(『鳴沙集』)収録のものを使用することが必要である。

<sup>36</sup> 注34羅振玉書簡に挙げられた敦煌寫本のうち、『左傳』(16)、『尚書』(18)、『本草序列』(40?)、『開蒙要訓』(29)、『莊子(讓王篇)』(19)、『七字唱本(目連救母事)』(71)、『度牒(二紙、均北宋初)』(23?)、(26)、建始二年寫『大般涅槃經』(429)、『志立安樂經』(13)、『宣元本經』(431)は「李氏鑑藏燉煌寫本目錄」に著録されている(括弧内の數字は榮氏翻刻本の番号)。いっぽう、『周易』單疏(すなわち本巻)、『史記』(張禹孔光傳)、『道德經』の名はどの目録にも見えない。

<sup>37</sup> 「史語所於抗戰勝利後、在北平買到唐寫本「周易正義」殘卷一紙……」。黄彰健「唐寫本周易正義殘卷跋」(『大陸雜誌』第42卷第9期、1971年5月)

<sup>38</sup> 現在Webサイトで公開されている畫像で見ると、本寫本の冒頭3字「相連而」のうち、「相」字すべてと「連而」の一部は裏打ちの紙に鉛筆書きされているようである。『大陸雜誌』の書影では、すでに現在同様の裏打ちがなされ「周易正義殘卷 存三十二行」の題が加えられていることは確認できるが、鉛筆による補寫は見えない。もっとも、當時はそれがまだなかったものか、寫眞や印刷の具合で確認できないものかはにわかに判断できない。

<sup>39</sup> 『敦煌論集續編』(臺灣學生書局、1983年)

<sup>40</sup> 「鄭目」の回想によれば、民國65(1976)年、鄭阿財らとともに傅斯年圖書館の書庫を見學した呉其昱は「……曾見塵封未理資料成捆、先生以爲當是幾經播遷、未遑整理、其間或有唐代拓片、敦煌寫卷等亦未可知(……ほりをかぶった資料の束をごらんになり、(呉)先生は、何度も移轉を経て整理のいとまがなかったのであろうが、この中には唐代の拓本や敦煌寫本などがあるかも知れないとお考えになった)。おそらく、一部の寫本については存在も知られ閱覽も可能であったが、すべての整理を終えて随時閱覽可能な状態にはなっていないのが、1970年代の状況だったのだろう。

## (2) 羅振玉：188107 (50) 「降魔變」

項楚氏は『敦煌變文選注(増訂本)』の中で、羅振玉『敦煌零拾』に収録された羅氏家藏本が現傳圖本であることを指摘している<sup>41</sup>。いま『敦煌零拾』所收の録文を傳圖本と對照するとその缺損狀況が完全に一致しており<sup>42</sup>、項説の正しさが確認できる。

## 四、入手経路

つぎに、傳斯年圖書館に保存されている檔案資料を參考に入手経路を再検討してみたい。なお、ここであつかう檔案は Web サイトで畫像公開中のもののほか、筆者が傳斯年圖書館にて閲覽または影印したものが含まれる。貴重な資料の閲覽、複寫をご許可いただいた傳斯年圖書館に謝意を表したい。

### (一) 西北考察團

中央研究院では、敦煌を含む西北地區に調査隊を二度派遣している。民國 31 (1942) 年の西北史地考察團と民國 33 (1944) 年の西北科學考察團がそれであるが、このうち後者にかんする檔案のいくつかには寫本購入についての記述がある。Web サイトの「相關檔案資料」欄ではこれらを紹介するとともに該當寫本の推定作業をおこなっている<sup>43</sup>、それを再検討してみたい。

## 1、漢文文獻

李 38-5-5 「夏鼐致傳斯年、李濟函」は民國 33 (1944) 年 11 月 25 日に敦煌滯在中の夏鼐から史語所へあてられた書簡であるが、そこに漢文寫本 4 卷の購入が報告されている。

ひとつは「六朝寫經(法華經殘本)一卷」とされるもので、同年 9 月に向達が省銀行の王主任なる人物の仲介で購入したとされる。Web サイトは 188080 (19) をそれに比定しているが、傳圖本中に六朝寫とされる(書體からの推定であろうか)『法華經』はこれ一件のみであるから、その推定は正しいとかんがえられる。

この寫本の來歴について夏鼐は、同年 8 月に清末の泥像中から寫本が発見され敦煌藝術研究所に收藏されたが、発見した工事夫らがひそかに賣りに出したものもあり、この寫本もその一つであろうと説明している<sup>44</sup>。夏鼐のいう 8 月の寫本発見の顛末はかれの「敦煌考古漫記」にやや詳細に記されており<sup>45</sup>、要するに今日いうところの土地廟寫本のことを指しているようである。ただし、問題の「法華經」がその一つであると推定する理由は、すくなくとも書簡でははっきり述べられてはいない。おそらく購入時期が発見直後であることと、夏鼐も報告するよ

<sup>41</sup> 『敦煌變文選注(増訂本)』(中華書局、2006 年) 639 頁。

<sup>42</sup> 『敦煌零拾』四「佛曲三種 其一」

<sup>43</sup> <http://lib.ihp.sinica.edu.tw/c/rare/dunhuang/01-4.htm>

<sup>44</sup> 千佛洞於八月間發現六朝寫本六十餘卷、係工人於清末泥像中、無意發現、雖爲所中職員所察覺、收歸所有、然小部分工人所匿藏、携出私售。九月間、向先生由省銀行王主任之介紹、爲攷察團購得六朝寫經(法華經殘本)一卷、疑即工人所得之物。(李 38-5-5 「夏鼐致傳斯年、李濟函」)

<sup>45</sup> 『敦煌考古漫記』(百花文藝出版社、2002 年) 78-79 頁。

うに土地廟寫本はみな六朝期の寫本であるとされていることによるのだろう<sup>46</sup>。

残る3點は「唐末五代之寫本三卷」であり、その内譯について夏鼐は、

一卷末尾書「維摩手記」、下書「張大慶」三字、當即『光啓元年沙州地志』

書寫人之張大慶。一卷係無量壽經三卷、接成三百余行。一卷有河西節度使贊詞。

と記している。Web サイトではこれらをそれぞれ、188104 (30)「維摩手記」、188096 (11)「大乘無量壽經」、188105 (31)「維摩經科文等小抄」に擬しているが、188104 (30) と 188096 (11) については寫本の外題または中題および内容が一致しているし、188105 (31) では連寫された「道場文」の中に「我河西節度使」の文字が見えるので、間違いない比定とおもわれる。

これら3卷購入のいきさつについて夏鼐は、ある製粉所の主人（一磨坊掌櫃）が前2卷を向達のもとに持ち込んだのだが、交換条件であった麥の値上がりがあり、はじめ賣り手の言い値は2卷で麥6石だったのを、結局188105 (31)「維摩經科文等小抄」をくわえた3卷を3石3斗余りで交換することにしたと記している。夏鼐によれば本書簡の時點で1石は6千元だから、現金換算で約2萬元であろうか。李38-4-7「夏鼐函傅斯年李濟」（1944年6月25日）によれば、作業員の給料をふくめた考察團の一ヶ月の出費が、ちょうど2萬元である。

## 2、胡語文獻

胡語文獻について報告する書簡として、Web サイトは2種を紹介している。まず敦煌で發掘中の夏鼐より史語所にあてられた李38-4-11「夏鼐函傅斯年李濟」（1944年7月31日）では、チベット文文獻について以下のように報告されている。

又向覺明先生云、此間民衆教育館有梵夾本之西藏佛經十余捆、係由千佛洞搬去、主持館務者不甚愛惜、擬由考察團與之接洽、以新出書籍與之交換（また向覺明〔達〕先生がおっしゃるには、ここ〔敦煌〕の民衆教育館に梵夾本のチベット佛典が十包み余りあり、これらは千佛洞から持ち出されたものなのですが、館の事務を取り仕切る人はあまり大事にしておらず、考察團と交渉して新刊書と交換しようと望んでいます）。

この記載を傳圖藏「敦煌文獻」に照らしてみると、書簡では梵夾本が十包み余りと言われているのに所藏本は卷子本が9卷であり、裝丁と數量に食いちがいがある。したがって、西藏文「敦煌文獻」の來源をここに求めることはできないようである。

つぎに李38-5-17「夏鼐函傅斯年」（1945年3月26日）は、すでに敦煌での發掘を終えて歸途についていた夏鼐が蘭州から史語所にあてた書簡であるが、ここで2種の西夏文文獻について購入の可否が諮られている。一つは現地の水利會社の趙敦甫なる人物の所有する西夏文『華嚴經』卷七十七および七十八で、もともと寧夏で鄧隆なる人物が得たのを4千元で買ったものだが、趙氏に賣却の意志があるという。いま一つは、「西夏文刻經五本」である。夏鼐書簡の文章を引用する。

<sup>46</sup> 「國立敦煌藝術研究所中華民國三十三年八月三十日發現藏經初次查驗目錄」には該當する寫本がみえない（蘇瑩輝『敦煌學概要』五南圖書出版有限公司、1988年、250-260頁）。ここに見える寫本は敦煌藝術研究院に接収されたものなので問題の寫本が著録されないのはむしろ當然であるし、だからこそ夏鼐も「工夫に隠匿され賣りに出された」ものの一つと推定しているわけだが、念のため記しておく。

另有一人有西夏文刻經五本、亦係寧夏出土、北平圖書館袁館長已託趙先生、與之接洽、但索價頗昂、且其人已赴河州、下月始返蘭、如果北平圖書館不欲購買、史研所是否欲購？（もう一人、やはり寧夏出土の西夏文刻經五卷を所有する人物がおり、北平圖書館の袁〔同禮〕館長が、すでに趙氏に依頼して交渉しておりますが、言い値が高いうえ、しかもその人は河州に行ってしまう、來月まで蘭州に歸りません。もし北平圖書館が購入しない場合、史語所としては購入いたしませんでしょうか？）

まず前者についてだが、傳圖藏「敦煌文獻」に西夏文『華嚴經』は存在しないのでひとまずは考察から除外できる。しかし後者については判断がむづかしい。188119 (44) 西夏文『六祖壇經』はちょうど5枚の斷片からなり夏鼐の報告と數量は一致するものの<sup>47</sup>、畫像を見るかぎりこれは寫本であって「刻經」ではないのである。ただ夏鼐の報告は傳聞であろうから、この「刻經」がまさに傳圖本『壇經』である可能性も依然としてあるだろう。いまは結論を保留しておきたい。

以上のように、傳圖藏胡語文獻は現在のところみな來歴不明といわざるをえない<sup>48</sup>。夏鼐書簡で言及された文獻のゆくえと同時に、今後の探索が待たれる<sup>49</sup>。

## (二) 慶雲堂と徐鴻寶

### 1、徐鴻寶書簡から

傳圖藏「敦煌文獻」は、北平や上海などの古物商から購入したものが多くを占めると見られる<sup>50</sup>。そのうち店名と仲介者が判明する唯一の例が、以下に検討する慶雲堂と徐鴻寶である<sup>51</sup>。

慶雲堂には後に觸れるとして、まずは徐鴻寶について略傳を確認しておきたい。徐鴻寶（1881-1971）、字は森玉。北京大學圖書館長、北平圖書館採訪部主任、東方文化事業總委員會圖書部主任、故宮博物院古物館館長などを歴任。各地の圖書館のために書籍の購入にあたったが、けっして書店からリベートを受けなかった

<sup>47</sup> 正確には、24cm のほぼ完全な1紙と、斷片が4枚。「鄭目」および <http://lib.ihp.sinica.edu.tw/c/rare/dunhuang/metadatahtml/188119.htm> 参照。

<sup>48</sup> ただし188110 (42) 「藏譯大乘般若波羅蜜多心經」は、筆者の見るかぎり現行チベット大藏經に収録された大本ではなく、未入藏の小本のようであって、内容上は藏經洞出土の可能性が高い。もっとも、筆者は西藏語、西藏佛教ともに門外漢であって、この問題は專家のご叱正をまちたい。上山大峻「敦煌出土のチベット譯般若心經」(『印度學佛教學研究』13-2 [26]、1965年3月)を参照。

<sup>49</sup> 敦煌市檔案局所藏の藏文寫經には梵夾装のものが9點含まれ、李38-4-11「夏鼐函傳斯年李濟」のいう民衆教育館所藏本との関係が疑われる。ただし、「十余捆」にはほど遠い數であることが問題ではあろう。李淑萍、黃維忠「敦煌市檔案局所藏藏文寫經定名」(『敦煌學輯刊』2002年第2期〔総第42期〕)参照。

<sup>50</sup> 前述のように、188071 (06) 「周易正義」は北平で購入されている。また「鄭目」は、中央圖書館(現國家圖書館)コレクションと同様、日中戦争の前後に上海や北京で収集購入されたものと推測している。

<sup>51</sup> 本節であつかう檔案資料の収集には楊峻峰氏のお手をわずらわせたほか、草書體の讀解にも楊氏の全面的なご教示を賜った。記して謝意を表したい。もちろん、翻字や内容理解の誤りには筆者に責任がある。

という<sup>52</sup>。また日中戦争さ中の民國 29 (1940) 年から 30 年には、文化財の海外流出防止を目的として善本古籍を買い上げ中央圖書館に納入する「文獻保存同志會」の活動にも参加していた<sup>53</sup>。

かれは、雜 36-69-24「徐鴻寶致那廉君函」においてつぎのように述べている。

手示誦悉。慶雲堂求鬻之敦煌卷子、寶曾寓目、塙爲李木翁藏物。均非贗品、可以收購。乞轉陳孟眞先生爲禱（お手紙拜受いたしました。慶雲堂が賣却を希望している敦煌卷子ですが、わたくしが見てみましたところ、確かに李木齋翁の舊藏品です。どれも贗作ではなく、購入されてよいでしょう。傅孟眞〔斯年〕先生にもお伝えいただければ幸いです）。

日付は原本には「九月四日」とのみ記されているが、Web サイトはこれを民國 37 (1948) 年の文書と推測している。おそらくは、後に見る補 4-4-11「慶雲堂法帖店致本所收據」が民國 38 (1949) 年 1 月 3 日付のものであることによるのだろう。拙稿も Web サイトの推定にしたがう。

書信中にみえる人名のうち、「那廉君」は後に見る慶雲堂関連檔案の中にも名が見え、史語所における書籍購入の實務擔當者であったらしい。「李木翁」とは見慣れない呼び方ではあるが、李木齋すなわち李盛鐸のことであろう。つまり徐鴻寶は慶雲堂が賣り出し中の「敦煌文獻」について、李盛鐸舊藏の眞品というふれこみで購入を勧めているわけである。じつは、徐氏と敦煌寫本および李盛鐸藏書とはこれ以前から浅からぬ因縁を持っていたようであるし、中央研究院と徐鴻寶や慶雲堂とのつながりも「敦煌文獻」のみではない。以下、これらについて検討したい。

## 2、徐鴻寶と敦煌文獻

1929 年、北京圖書館に寫經組が成立したが、徐鴻寶は胡鳴盛、許國霖らとともにその一人であったことが知られている。ペリオ本の寫眞の分類目録作成や古籍整理のほか、館藏敦煌遺書の目録編纂がかれらの主な任務であって、その成果は 1935 年に『敦煌石室寫經詳目』、同『續編』として結實しているが、ともに未公刊である。方廣錫氏によって胡鳴盛「敦煌石室寫經詳目總目凡例」が翻刻發表されているものの<sup>54</sup>、胡氏は『詳目』編集の擔當者にはしばしば出入りがあったことを記しつつ李柄寅、許國霖、李光輝の三人を功勞者として特筆するのみで<sup>55</sup>、徐鴻寶の參與の程度は明らかでない。しかしながら、徐氏がここでじかに敦煌文獻に觸れ<sup>56</sup>、一定程度の知識をたくわえたことは間違いないだろう<sup>57</sup>。

<sup>52</sup> かれの傳記については、『現代中華民國滿洲帝國人名鑑』、橋川時雄『中國文化界人物總鑑』（名著普及會、1982 年）、倫明「辛亥以來藏書紀事詩」の該當条および楊號氏による補傳（『辛亥以來藏書紀事詩』北京燕山出版社、1999 年）を参考にした。

<sup>53</sup> 蘇精「抗戰時秘密搜購淪陷區古籍始末」（『近代藏書三十家』傳記文學出版社、1983 年）

<sup>54</sup> 「北京圖書館藏敦煌遺書勘査初記」（『敦煌學佛教學論叢（上）』）

<sup>55</sup> 編輯此目人凡數更、鳴盛廣續編成此目……繕清此目以北平李君柄寅用力最久、次則湘陰許君國霖、次則北平李光輝、特此申明、用昭三君之勤勞。

<sup>56</sup> 筆者は未確認ながら、BD14568「諸經要集卷九」には徐鴻寶の題款が付されているという。『中國國家圖書館藏 敦煌遺書精品選』（2000 年）16 頁。

<sup>57</sup> この項は注 54 掲方廣錫論文のほか、榮新江「中國和日本的敦煌學研究」（『敦煌學十八講』）を参考にした。

### 3、徐鴻寶と李盛鐸藏書

徐氏と李盛鐸藏書とのかかわりは敦煌文書とのそれよりもやや長期にわたっている。まず、昭和3（1928）年、羽田亨が李氏をおとずれ敦煌文献を閲覧した際の仲介者として、徐鴻寶の名があげられている<sup>58</sup>。もっとも、この時には徐氏は天津に同行まではしなかったらしい<sup>59</sup>。つぎに民國26（1937）年6月、その年2月に逝去した李盛鐸の舊藏書を買い上げるため、教育部は人員を李氏邸に派遣して藏書調査および遺族との折衝をおこなっているが、この時の派遣人員中には徐鴻寶の名をはっきり確認でき<sup>60</sup>、胡適の日記によれば善本書の調査にも確かに參與しているのである<sup>61</sup>。

### 4、徐鴻寶と歴史語言研究所

では、中央研究院との関係はどうか。じつは、史語所の集書に徐鴻寶がかかわるのは「敦煌文獻」が初めてではない。史語所檔案のうち元370-7-13b「徐鴻寶函傅斯年」（1931年1月21日）によれば、徐氏は史語所に對して熹平石經拓本の寄贈を申し出ている<sup>62</sup>。傅斯年圖書館には熹平石經拓本の收藏が數點あり、そのうちの幾つかが徐氏寄贈本にあたるはずである。また、あたかも「敦煌文書」購入について慶雲堂と交渉中であつたとおもわれる1948年10月、史語所は徐鴻寶を通信研究員に任命している。関連檔案によれば、まず9月15日に史語所所長であつた傅斯年から中央研究院院長に推薦状が出され、同年第4次院務會議の批准を経て10月8日付で中研院總辦事處から聘書が発行されている<sup>63</sup>。このうち、傅斯年による推薦書にはつぎのように言われている。

徐鴻寶先生、博學洽聞、於經史文辭諸子、無不研精貫淹、得其津涯、尤長于版本目錄金石之學、凡本所及故宮博物院、北平圖書館入藏之珍籍、無不經其品評、始得正確之鑑定。以前協助本所之事亦太多。茲經本所卅七年度第三次所務會議決議、提請院長聘徐先生爲本所通信研究員（徐鴻寶先生は博學多識、經書、史學、文學、諸子のすべてに詳しく通じ、その要諦を得ておられますが、版本・目錄・金石の學をもっとも得意とし、およそ本所や故宮博物院、北平圖書館收藏の珍籍は、どれも先生の品評を経て、はじめて正確な鑑定を得たものです。以前から本所に助力を賜ることも極めて多くありました。ここに本所の〔民國〕37年度第三回所務會議の決議を経て、徐先生を本所

<sup>58</sup> 羽田亨「景教經典志玄安樂經に就いて」（『羽田博士史學論文集』下巻「言語・宗教編」東洋史研究會、1958年）、榮新江「李盛鐸藏敦煌寫卷の眞與偽」（『鳴沙集』）。

<sup>59</sup> 従つてこれを收藏せらるゝ李盛鐸氏に對しては、我が内藤博士を始め、中華民國の關鐸氏・吳燕紹氏・徐鴻寶氏などを煩はして懇篤な紹介を得、殊に關・吳兩氏は態々北平から天津まで赴いて斡旋の勞を執つて呉れられたのであつた（『景教經典志玄安樂經に就いて』270頁）。

<sup>60</sup> 『大公報』民國26年6月30日第六版第二張「李木齋藏書五千種／政府收買條件接近／教育部願出四十萬元／起運之前將在津公開展覽」、榮新江「所謂李氏舊藏敦煌景教文獻二種辨偽」（『鳴沙集』）。

<sup>61</sup> 胡適日記1938年6月15日「李氏兄弟子侄搬出他家善本書、趙裴雲紀錄、〔袁〕守和、徐森玉與我同看。」（『胡適日記全編6 1931-1937』安徽教育出版社、2001年）

<sup>62</sup> 寶集拓熹平石經殘字昨已畢工、共得二百五十餘紙、謹檢一份□贈貴所、以備參考。即請察收。目錄未寫定、容續□。

<sup>63</sup> 京18-78「總辦事處來函」（1948年10月8日、10月11日史語所受け取り）

通信研究員に召請することを院長に懇請いたします)<sup>64</sup>。

徐氏を通信研究員に招聘する理由として傅斯年は、かれが版本金石の學に長じ、史語所や各地圖書館の古籍購入その他に功績があったことを挙げている<sup>65</sup>。先に見た拓本の寄贈も含めて徐氏は日ごろから史語所のために古籍収集の仲介や鑑定をおこなっていたのであり、「敦煌文獻」の鑑定もその流れの上で捉えられるのである。

## 5、慶雲堂と歴史語言研究所

次に購入元の「慶雲堂」だが、これまた「敦煌文獻」以前から交渉があったようであり、敦煌文書購入の前年にあたる1947年にも慶雲堂から拓本を購入している。関連檔案を検討してみると、京4-1-10-3「余遜函傅斯年」(1947年2月25日)、京4-1-10-4「余遜函那廉君」(1947年2月25日)では、慶雲堂の拓本は中央圖書館と均分購入することになっていたが、東北地区の書籍や文化財の買い上げ用豫算1億元の余りを拓本の費用に回せるので、史語所單獨購入も可能であると報告されている<sup>66</sup>。筆者の収集した資料からはこの購入計畫の顛末を知ることができなかったが、京4-1-10-5「余遜函那廉君」(1947年3月2日)では拓本を中國旅行社に委託して南京へ移送することの是非が諮られ<sup>67</sup>、京4-1-10-4への返信とおもわれる京4-1-10-6「那廉君函余遜」(1947年3月2日)では、「銅器部分由中央圖買(二百萬)、石器部分本所買(廿四?萬)。但孟眞〔傅斯年〕先生可向蔣館長商量、由本所全買」と指示されているのを見ると、問題は單獨購入の可否のみで、何らかのかたちでの購入は決定事項であつたらしい。

慶雲堂について今すこし検討すれば、補4-4-11「慶雲堂法帖店致本所收據」に「北平琉璃廠二十九號」とその住所が記されており、孫殿起『琉璃廠小志』第四章「販書傳薪記」の「帖業」の項にはつぎのような記載がある。

慶雲堂 楊□□、陝西部陽縣人、外號楊腸子、民初曹子芳繼其業。

徒 薛敬銘

慶雲堂 張國材、字彥生、吳橋縣人、於民國十九年開設。

徒 王敏 張書瀛<sup>68</sup>

このうちどちらが問題の慶雲堂なのかは判然としないが、補4-4-11「收據」には「張明啓印」なる印章が押されており、これは第二の慶雲堂の主人・張國材ま

<sup>64</sup> 雜23-15-23「傅斯年致院長函」(1948年9月15日)

<sup>65</sup> 『辛亥以來藏書紀事詩』の略傳でも、「吳興徐森玉鴻寶、夙精版本目錄之學。數年以來、爲北平東方各圖書館購書、凡耗數十萬金、國內珍本、盡歸公庫」(120頁)と云い、史語所の評價と一致している。

<sup>66</sup> 苑峰兄經手購買之慶雲堂拓片、師嘗有與中央圖書館均分之說、苑峰兄曾上書請示。日前接蕭綸薇兄通知謂院中由國庫撥到一億元為購買東北圖書彝器之用、除以一部分還北大墊款外、余存作購買書籍古器物之用。是此一部分拓片、不必再與中央圖書館均分、不識已與將緯堂先生說好否。如已決定、即由本所償還北大所墊拓片購價(京4-1-10-3「余遜函傅斯年」)。

張苑峰兄經手購得之慶雲堂拓片、是否尚須與中央圖均分(京4-1-10-4「余遜函那廉君」)。

<sup>67</sup> 苑峰兄前經手購買之慶雲堂拓片及李光壽兄所索檔案精品、遜擬裝箱託中國旅行社運京、不審傅所長之意如何。

<sup>68</sup> 『琉璃廠小志』(北京古籍出版社出版、1982年)268頁。

たは徒弟・張書瀛のことかも知れない。いずれにせよ、孫殿起が慶雲堂を書店ではなく「帖業」に分類したことに注意したい。「收據」に押された店印は「慶雲堂法帖店」となっているし、1947年に購入が討議されたのも拓本である。さらに雑 36-69-33「購書單」によれば、「敦煌文獻」購入の際にも「吳禪國山碑」をはじめとする拓本 20 種の購入がともに検討されていたのである。おそらく、「敦煌文獻」は慶雲堂にとってはややイレギュラーな商品であったが、書法愛好家の需要を見込んで仕入れたのであろう。それが結局は史語所の所有に歸することになったのである。

## 6、慶雲堂納入「敦煌文獻」の性格

論述が多岐にわたったが、慶雲堂納入分「敦煌文獻」の購入事情とその性格についてまとめておきたい。仲介者の徐鴻寶は公的所藏期間の集書に缺かせない鑑定家であり、慶雲堂との取り引きも初めてではなかった。同時に拓本の購入も検討していることから見ても、史語所にとってこの「敦煌文獻」購入は、ほぼ通常の圖書購入事業の流れとしておこなわれたようである。もっとも、それでも「敦煌文獻」には慎重にならざるを得なかったようではある。「手示誦悉」という書き出しからして雑 36-69-24「徐鴻寶致那廉君函」は明らかに返書であり、慶雲堂藏「敦煌文獻」の信頼性に不安をおぼえた史語所の諮問に對してあらためて太鼓判を押して見せたとおぼしい。そして結局は徐氏の一言が史語所に「敦煌文獻」購入を決断させたようである。

そこで問題となるのが、李盛鐸舊藏という一点である。徐鴻寶が紹介する寫本の目録は次章で紹介するが、これらについて李盛鐸舊藏敦煌寫本の諸目録に對應する卷子を見出すことはできない。もちろん、『佛名經』など遺品の多い經典については著録があっても特定できないという事情もあるが、『圓明論』のような特徴的な作品が見られないのは何より不審である。榮新江氏によれば、李氏所藏敦煌文獻は 1935 年にそのほとんどが日本に賣却され、1937 年に李氏が没するとかれの藏書はすべて北京大學圖書館に買い上げられているから、それ以降に世に現われた敦煌寫本は李盛鐸舊藏ではありえない<sup>69</sup>。しかしながら 188071「周易正義」のような例もあり、李氏没後に現われた寫本を一律に李氏舊藏ではないと断言はできないのである。また假に李氏所藏ではないとすれば、敦煌寫本にも一定の知識を有し、李氏没後に藏書を處理した當事者の一人である徐鴻寶が李盛鐸藏と發言していることがまた別な問題となる。事情は相當に複雑であって、筆者にはにわかに結論を下すことができない。

こうした問題も念頭におきつつ、取引のおこなわれた 1948 年という時代についてかんがえてみたい。雑 36-69-24 には、一月前に知らせた李盛鐸藏古寫經二十余种は別人に賣却濟みという文言があるから<sup>70</sup>、當時の北平には李氏舊藏と稱する敦煌寫本がかなり出回っていたようである。事情は南京でも同じだったらしく、國家圖書館（臺北）所藏敦煌寫本のうち、43「摩訶般若波羅蜜經第一」、

<sup>69</sup> 「所謂李氏舊藏敦煌景教文獻二種辨偽」、「李盛鐸藏敦煌寫卷の眞與偽」（『鳴沙集』）、「敦煌寫本の眞偽辨別」（『敦煌學十八講』）。

<sup>70</sup> 「一月前書、買孫助廉處有六朝唐人寫卷子二十余种、亦爲李物、惜已爲紙商陳某購」。

56「妙法蓮華經」、65「妙法蓮華經如來壽量品第十六」の三點について「三十七年五月十日京購」、すなわち西暦1948年の購入であるとの記録が残されている<sup>71</sup>。また、これまた李盛鐸舊藏と伝えられ今に至るまで眞贋論争が續けられているプリンストン大學藏「太上玄元道德經」にも<sup>72</sup>、1948年の跋文が附されていることに注意したい<sup>73</sup>。傅斯年圖書館に残された慶雲堂からの領收書の日付は、人民解放軍の北平入城を目前にした「38年1月3日」（補4-4-11）である。國共内戦の末期、混亂の中で李盛鐸舊藏と稱するものを含む「敦煌文獻」が市場に流出し、各圖書館、研究所はそれらの買い上げを急いでいたものであろう。

以上のように、慶雲堂納入分が李氏舊藏である可能性は完全に排除できないものの、疑わしい要素の方がやや多いようである。現時点では、188071「周易正義」のような確かな裏づけの探索もこころみつつ、いわゆる李盛鐸舊藏本につきまとう疑惑を考慮して慎重に扱うほかないであろう。

## 五、慶雲堂納入漢文寫本の比定

それでは、傅圖藏「敦煌文獻」から慶雲堂納入分を特定してみよう。慶雲堂關連の寫本購入リストには次の三種が知られる。それぞれに記された經名に通し番號を附して掲げる。

①雜 36-69-24「徐鴻寶致那廉君函」（1948年9月4日）

(1) 唐人寫金剛經（首尾全）／(2) 唐開元款寫經／(3) 大般涅槃經（大業四年）／(4) 圓明論／(5) 摩訶般若波羅密經／(6) 六朝經論釋（首尾全）／(7) 維摩詰所說不可思議經／(8) 唐佛像一張／(9) 普通經三卷

②雜 26-69-33「購書單」

(10) 維摩詰所說不可思議解說經一捲／(11) 大般涅槃經一捲／(12) 六朝論釋一捲／(13) 摩訶般若波羅密經一捲／(14) 唐開元款寫經一捲／(15) 唐人寫經精品一捲

③補 4-4-11「慶雲堂法帖店致本所收據」（1949年1月3日）

(16) 六朝草書法華儀記一卷／(17) 六朝大涅槃經一卷／(18) 六朝寫經袿橫兩張／(19) 唐人寫經四卷

①は徐鴻寶書簡に附された目録である。②には前述のように拓本のリストも書かれているが省略する。これら三種の關係は必ずしも明確ではないが、Webサイトでは①が参考價格のリストで②が實際の購入價格を記した文書とみている（ここでは價格は省略した）。では、順番に比定作業をおこないながら、あわせて氣づいたことを記しておきたい。

<sup>71</sup> 鄭阿財「臺灣地區敦煌寫本的收藏與研究之考察」（『敦煌學』21、1998年6月）、潘重規「國立中央圖書館藏敦煌卷子題記」（『敦煌學』2、1975年12月）。

<sup>72</sup> 贗作說到周珏良「我父親和書」（『文獻』21、1984年6月）、池田温『中國古代寫本識語集録』（東京大學東洋文化研究所、1990年）、榮新江「李盛鐸藏敦煌寫卷的眞與偽」があり、眞品說到饒宗頤「索統寫本《道德經》殘卷再論」、王素「西晉索統寫《道德經》殘卷續論——兼談西晉張僞寫《孝經》殘卷」（『首都博物館叢刊』17、2003年9月）がある。

<sup>73</sup> 前注掲王素論文に、1948年の黃賓虹および葉恭綽の題記が紹介されている。

- (1) 唐人寫金剛經（首尾全）：188077（46）「金剛般若波羅蜜經」  
 傳圖藏に『金剛經』は二件存するが、首尾完具するのは188077（46）のみなので特定できる。  
 本寫本には長慶2（822）年に靈幽法師が加えたといういわゆる「冥司偈」にあたる部分が存在せず、増廣本の影響を被っていないテキストといえる<sup>74</sup>。  
 また卷首には糊しろの跡らしきものがあり、前綴されていた紙とおもわれる細長い紙片がついている。本来はもっと長い卷子の一部かも知れない。
- (2) 唐開元款寫經：188088（07）「涅槃經節鈔」  
 傳圖藏に開元年間の識語を持つのは本寫本のみである。内容は第一章に既述。
- (3) 大般涅槃經（大業四年）：188090（48）「隋大業款寫大般涅槃經」  
 經名、識語ともに一致するのはこれのみである。「鄭目」、Webサイトともに卷末識語の録文を載せるが若干の誤植らしき字も見られるので、煩を厭わずここにも録文を掲げる。

- 1 大業四年二月十五日慧休知五眾之易遷曉二字之難
- 2 遇謹割衣資敬造此經一部願乘茲勝福三清淨業
- 3 四圓明戒慧日增惑累消滅現在尊卑恆招福慶七世久遠永
- 4 絕塵勞普被含生遍沾有識同發菩提趣薩婆若
- 5 清信弟子尹嘉禮受持
- 6 開九開十開十一年各一遍

さて本寫本は卷第二十六だが、各地の「敦煌文獻」中に僚卷がすこぶる多い。池田温『中國古代寫本識語集録』や黄徵『敦煌願文集』<sup>75</sup>、「鄭目」の挙げる7種のほか、羅福婁「古寫經尾題録存」には「日本大谷氏藏」として卷第十二の存在が記録されている<sup>76</sup>。また清野謙次舊藏に「大般涅槃經卷第十三・一卷（隋大業四年（A.D.608）寫）」が見えるが、あるいは同種のものかも知れない<sup>77</sup>。『中國古代寫本識語集録』では7點のうち3點に〈疑〉の記號が附されており、傳圖本も扱いには注意が必要である。

<sup>74</sup> 『般若心經 金剛般若經』（岩波文庫、1960年）補注に紹介された入矢義高説、平井有慶「金剛般若經」（『講座敦煌7 敦煌と中國佛教』大東出版社、1984年）、何峰「從《金剛經》寫本特色淺談寫本斷代問題」（『敦煌學』21、1998年6月）を参照。

<sup>75</sup> 『敦煌願文集』（岳麓書社、1995年）874-875頁。

<sup>76</sup> 『永豐鄉人雜著續編』所収（『羅雪堂先生全集 初編』三、文華出版公司、1968年）

<sup>77</sup> 京都國立博物館藏守屋コレクション本も卷第十三のため、素直にかんがえれば別種のテキストであるが、守屋本は『識語集録』で疑寫本とされるうちのひとつである。したがって、偽寫卷の粉本となった眞品である可能性も十分にあると言える。なお、清野謙次舊藏敦煌寫經については、「燉煌本古逸經論章疏並古寫經目錄」（『法寶總目錄』）、高田時雄「清野謙次蒐集敦煌寫經の行方」（『漢字と文化』9、2006年11月）を参照。

- (4) 圓明論：188106 (10)「圓明論」  
題名の一致から容易に特定できる。内容については第一章に既述。
- (5) 摩訶般若波羅蜜經：188074 (23)「節鈔摩訶般若波羅蜜經」  
傳圖藏中の『大品般若經』類は188074 (23)、188075 (24)、188076 (29)の三件であるが、このうち188074 (23)のみが「摩訶般若波羅蜜經」という首題を残しており、慶雲堂目録はそれにもとづいているとおもわれる。内容については第一章に既述。
- (6) 六朝經論釋(首尾全)：188102 (13)「大智度經釋論」  
一行目冒頭に「論、釋して曰く」云々とあるのを、「論釋」を書名と誤讀したものとおもわれる。「首尾全」という点でも一致する。ただ、尾題に「大智度經釋論卷第七十八」と明記されているのをなぜ採用しなかったのかという問題は残る。
- (7) 維摩詰所說不可思議經：188093 (32)「維摩詰所說經」  
傳圖藏中の『維摩經』は188092 (33)と188093 (32)の2件であるが、後者の首題には「維摩詰所說經一名不可思議解脫佛國品第一」とあり、慶雲堂目録はこれに由來するとおもわれる。
- (8) 唐佛像一張：不明  
「佛像卷子」が188108 (01)、188109 (02)の2件存するが、慶雲堂目録所載のものがどちらなのかはわからない。
- (9) 普通經三卷：188076 (29)「摩訶般若波羅蜜經淨佛國品八十一」  
本寫本の紙背には「普通寫經三卷」と記されており、慶雲堂納入分と特定できる。ただ、「三卷」というからには他に2巻があったものか、この一巻を何らかの理由で「三卷」と見なしたものかは不明である。  
本寫本の首題には「淨佛國品八十一(卷三十八)」とあるが<sup>78</sup>、大正藏は卷第二十六淨土品第八十二であって品名、品數と調卷がことなっている。「大正新脩大藏經勘同目録」によれば、これら三要素がすべて一致するのは神護慶雲二(768)年寫聖語藏本である。これは、188074 (23)「節鈔摩訶般若波羅蜜經」とまったく同じ状況である。
- (10) 維摩詰所說不可思議解脫經一捲：(7)と同一卷？
- (11) 大般涅槃經一捲：(3)と同一卷？
- (12) 六朝論釋一捲：(6)と同一卷？
- (13) 摩訶般若波羅蜜經一捲：(5)と同一卷？
- (14) 唐開元款寫經一捲：(2)と同一卷？

<sup>78</sup> 傳斯年圖書館のサイトでは卷首畫像が欠けているので、IDPで公開中の畫像によった。

- (15) 唐人寫經精品一捲：188091 (25)「佛名經（十六卷本）卷第五」  
 舊藏者によるらしき題箋に「敦煌唐人精書佛名經九節」とあり、慶雲堂目録はそれに由來するとおもわれる。ただ、なぜより具體的な「佛名經」の方を採用しなかったのかという疑問は残る。内容については第一章に既述。
- (16) 六朝草書法華儀記一卷：188098 (28)「法華義記」  
 本寫本の尾題は「法華義記第一」であり、紙背に記された呉寶煒の題記には「此卷書法兼行草、猶未盡脫篆隸、筆意在六朝法書中亦獨見精妙……六朝人曇慶寫、流通後代」とあって、六朝人の寫した行草體と見なしている。これらの點から特定は容易である。
- (17) 六朝大涅槃經一卷：188089 (17)「大般涅槃經」  
 卷末の識語には「大般涅槃經卷第二十五／元年七月十五日晝、法持敬寫」とあり、やはり紙背に記された呉寶煒の題記ではこれが「北魏」と比定されている。これらの點から慶雲堂の云う「六朝大涅槃經」が本寫本であると推定できるが、(16)の「法華義記」とともに呉寶煒舊藏である點も傍證となるであろう。
- (18) 六朝寫經裱橫兩張：不明
- (19) 唐人寫經四卷：不明 (188099 (09)「四分律」?)  
 188099 (09)「四分律」を見ると、泊園居士(周樹模)の題箋と清道人(李瑞清)の題記にひとしく「唐人寫經殘卷」とあり、4卷のうち1卷はこれを指している可能性がある。

## 六、傳圖藏「敦煌文獻」の特徴——むすびにかえて

その入手經過から傳圖藏「敦煌文獻」を見た場合、二つの特徴が看取しうる。一つは「敦煌文獻」が商品として扱われうる状況で購入されたこと、いま一つは仲介者の役割が決定的であることである。一つ目については言うまでもないであろう。古物商たる慶雲堂はもちろん、西北地區の個人收藏家とも金品を媒介とした取引がなされ、調査隊からの報告書簡からは生々しい値段交渉の様子までもうかがえるのである。

つぎに、二つ目について西北考察隊における向達の存在をいま一度かんがえてみたい。李 38-5-5「夏簫致傅斯年、李濟函」に記された4卷のうち、188080 (19)「妙法蓮華經」は向達が購入したものであるが、他の3卷にしても、

此三卷寫本、向先生皆曾過目、除『無量壽經』爲常見之物、其余二卷、向先生以爲皆值得購買、臨行時且曾囑咐、設法購取(この三卷の寫本は、向達先生がみな目を通されたものですが、『無量壽經』がよく見られるものであるほかは、他の二卷は向達先生は買うに値するとのお考えで、何とかして買い取るようにと出發にあたっての仰せでした)。

といった具合で、すでに敦煌を去った向達の鑑定意見が大きく影響しているのである。もちろん、夏鼐も「敦煌文獻」収集には積極的であって、先の引用に續いて、

敦煌寫經民間尚有收藏、但已日漸減少、佳品更不多見、故生意攷察隊不妨購買數卷、以作標本（敦煌寫經は民間にまだ收藏されているものの、しかし日を迫うにつれて減っており、優品はなおさら少なくなっています。ですからわたくしとしましては、攷察隊が數卷を購入して標本とするのもよいだろうと思っております）。

とみずからの見解をも述べている。しかしながら、李 38-4-11「夏鼐函傅斯年李濟」で言及された民衆教育館藏チベット文文獻も、やはり向達の紹介であったことを想起したい。史語所を代表して西北攷察隊に参加していた夏鼐はやはり考古學者なのであって、文獻収集の重要性は理解していたものの、具體的な探索や鑑定は歴史文獻學者としての向達を尊重しようとの気持ちが強かったのではあるまいか。實際、かれの書簡で文獻購入についての報告がなされるのは、つねに發掘報告の後、書簡の最後になってからなのである。

先に見たとおり慶雲堂納入分にしても、以前から取引のあった古物商から持ちかけられた話に、やはりかねて信賴の徐鴻寶からお墨付きを與えられての購入という事情なのであった。厳しい人的、金錢的條件の中で、史語所が最善を盡くしたことは疑いない<sup>79</sup>。しかし結果から見て、その集書過程がやや主體性を缺いていたことは否めない。こうしたことは、李盛鐸舊藏説の信憑性と同時に、傅圖コレクションの資料價値を減ずる要素であるだろう。

それでは、われわれは傅圖藏「敦煌文獻」をどう扱えばよいのか。最後に、内容と來歴を勘案した現時點での筆者の態度を記しておきたい。まず、敦煌で入手されかつ内容的に偽造が困難なものとして 188104 (30)「維摩手記」、188105 (31)「維摩經科文等小抄」が擧げられる。特に 188104 (30)は複雑な構成を持ち、偽造は少なくとも内容的にはほぼ不可能であろう。この2點が傅圖コレクションでもっとも信賴性の高い寫本である。

それらに次ぐ價値を持つ寫本として、188098 (28)「法華義記」、188106 (10)「圓明論」および 188071 (06)「周易正義」がある。前二者は來歴から言えば疑わしい點もあるものの、「法華義記」の偽造は不可能であろうし、傅圖本「圓明論」には他本には見られない七言偈が含まれ、これまた偽造は困難である。最後の「周易正義」は事情が逆で、内容は現行本をもとに偽造も可能であろうが素性がはっきりしている寫本なのである。また、188077 (46)「金剛般若波羅蜜經」の本文や 188074 (23)「節鈔摩訶般若波羅蜜經」、188076 (29)「摩訶般若波羅蜜經淨佛國品八十一」の調卷が古形を残していることも積極的に評價してよいだろう。

その他の寫本については、慎重な検討を経た後でなければ資料としては使にくいことになるが、中でも惱ましい例としてコレクション中に含まれる二種の抄

<sup>79</sup> 李 38-5-17「夏鼐函傅斯年」では「西夏文刻經」に触れて、「能出值多少？如在萬元以内、攷察團可以購買、但是如須數萬元、則恐須另籌款子（いくらまで出せるでしょうか？もし1萬元以内であれば攷察團で買うことができますが、しかしもし數萬元かかるのであれば、おそらく別に資金を工面しなければなりません）」と報告している。つねに限られた資金のやりくりを考えながら調査に従事していた様子がうかがえる。

經がある。それは188074 (23)「節鈔摩訶般若波羅蜜經」と188088 (07)「涅槃經節鈔」のことであるが、經文の大膽な摘録を當時の學習状況を生々しく伝えるものと見るか、拙劣な偽造が破綻を見せたものとかんがえるか、にわかには結論が下しがたい。特に188088 (07)の明らかな誤りを含む獨特な朱點の打ち方をどう理解するか、検討が必要であろう。

總じて言えば、傳圖コレクションには來歴は疑わしいが内容は信頼できるものが含まれ、そのことが問題の解決を困難にしている。今回は内容と入手経路のみの考察であったが、ぜひ専門家によって書風や紙質などからする検討がおこなわれることを期待したい。もちろん、拙稿での考察範囲にも無知から来る誤りや的外れな議論が多々あることと恐れる。大方のご叱正を乞う次第である。

#### 附1：傅斯年圖書館藏「敦煌文獻」漢文部分目錄補

〔凡例〕

- 1、本「目錄補」は、寫本の定名の修正および舊所藏者と入手経路の一覽作成を主要目的とし、同時に傅斯年圖書館による編號と鄭阿財「題記」の編號を對照して研究者に利便を供するものである。款式などその他の情報については、鄭氏「題記」および傅斯年圖書館のWebサイトを参照されたい。
- 2、首題、尾題を有する寫本については、原則としてそれらを寫本名とした。
- 3、首題、尾題があっても、便宜のため學界慣行の名稱に統一した場合がある。
- 4、「内容」のうち紙背は「V」で示し、複數作品が連寫された寫本は、それぞれの作品名に「a. b. c.」の通し記號をふった。
- 5、従來の定名に修正、増補を加えた場合は、その部分を太字ゴチックで示した。
b>
- 6、「舊藏者」「入手経路」欄は鄭氏やWebサイトによる比定のほか、その後の諸研究や筆者の推定による新知見を太字ゴチックで補った。

編號	鄭目編號	内容	舊藏者、藏書印等	入手経路
188071	06	周易正義	李盛鐸	日中戦争後に北平で購入
188072	14	大般若波羅蜜多經卷第三十五 (尾題)		
188073	15	大般若波羅蜜多經卷第四百二十二		
188074	23	<b>節鈔摩訶般若波羅蜜經</b>		<b>慶雲堂</b>
188075	24	摩訶般若波羅蜜經具足品		
188076	29	摩訶般若波羅蜜經淨佛國品		<b>慶雲堂</b>
188077	46	金剛般若波羅蜜經 (首、尾題)		<b>慶雲堂</b>
188078-9	47	金剛般若波羅蜜經 (尾題)		
188080	19	妙法蓮華經信解品		甘肅省銀行王主任の紹介により向達が購入
188081	18	妙法蓮華經化城喻品		
188082	20	妙法蓮華經妙音菩薩品		
188083	21	妙法蓮華經妙音菩薩品	啓功	
188084	03	佛說慧上菩薩經上	虛 (龔?) 維疆	

188085	04	佛說觀無量壽佛經、V. a. 女夫詞、b. 雜抄		
188086	12	大方等大集經日密分中分別品第四之二		
188087	16	大般涅槃經如來性品		
188088	07	涅槃經節鈔（開元十一年）		慶雲堂
188089	17	大般涅槃經卷第二十五（尾題）	吳寶煒	慶雲堂
188090	48	大般涅槃經卷第二十六（尾題）（大業四年）		慶雲堂
188091	25	佛名經（十六卷本）卷第五		慶雲堂
188092	33	維摩詰所說經卷上（尾題）		
188093	32	維摩詰所說經一名不可思議解脫佛國品第一（首題）		慶雲堂
188094	22	思益梵天所問經卷第四（尾題）		
188095	45	金光明最勝王經最淨地陀羅尼品第六（首題）		
188096	11	大乘無量壽經（中題）		西北考察團が敦煌にて磨坊の主人から購入
188097	49	隨求即得大自在陀羅尼神呪經（尾題）	許承堯、吳博全	
188098	28	法華義記第一（尾題）	吳寶煒	慶雲堂
188099	09	四分律卷第一	周樹模	慶雲堂？
188100	08	四分律卷第五十八		
188101	05	優婆塞戒經卷第三（尾題）	啓功	
188102	13	大智度論卷第七十八		
188103	27	法華義疏卷第三、V. 金剛般若旨贊卷下（首題）		
188104	30	a. 維摩手記（外題）、b. 押座文（擬）、V. a. 大般若經目錄、b. 維摩手記雜寫、c. 賢愚經云（十夢）、d. 佛教教理雜寫		西北考察團が敦煌にて磨坊の主人から購入
188105	31	a. 維摩經科文、b. 河西節度使道場文、c. 和菩薩戒文雜寫、V. 和菩薩戒文		西北考察團が敦煌にて磨坊の主人から購入
188106	10	a. 圓明論、b. 阿摩羅識、c. 七言		慶雲堂
188107	50	降魔變	羅振玉	

## 附 2、中央研究院歷史語言研究所と敦煌文獻關連年表

〔凡例〕本「年表」は、中央研究院歷史語言研究所における敦煌文獻の收集整理および研究に関する事項の一覧である。

- 民國 17（1928）年 歷史語言研究所成立、「敦煌材料研究班」設置（廣州）  
 民國 18（1929）年 史語所、北平に移轉。八つの研究班を三つに統合、敦煌材料研究班は廢止。  
 民國 20（1931）年 陳垣『中央研究院歷史語言研究所專刊之四 敦煌劫余錄』刊行  
 史語所、上海に移轉（この頃、古物商より寫本購入？）  
 劉復『中央研究院歷史語言研究所專刊之二 敦煌掇瑣』刊

行<sup>80</sup>

- 民國 23 (1934) 年 史語所、南京に移轉  
民國 26 (1937) 年～ 史語所、長沙に移轉。のち、昆明に移轉  
民國 30 (1941) 年 史語所、四川省南溪縣李莊に移轉  
民國 31 (1942) 年 西北史地考察團派遣  
民國 33 (1944) 年 西北科學考察團派遣、敦煌にて寫本購入  
民國 35 (1946) 年 史語所、南京に移轉  
民國 37 (1948) 年 史語所、臺灣桃園縣に移轉  
慶雲堂より寫本購入  
民國 38 (1949) 年 慶雲堂より寫本購入  
民國 41 (1952) 年～ 188097 (49)「隨求即得大自在陀羅尼神呪經」購入  
民國 43 (1954) 年 史語所、臺北市南港に移轉<sup>81</sup>  
民國 60 (1971) 年 黃彰健「唐寫本周易正義殘卷跋」(『大陸雜誌』第 42 卷第 9 期、1971 年 5 月) に、188071 (06)「周易正義」の書影が掲載。  
民國 65 (1976) 年 吳其昱、鄭阿財、書庫を見學  
民國 85 (1996) 年 石璋如『中央研究院歷史語言研究所田野工作報告之三 莫高窟形』發行  
民國 88 (1999) 年 「鄭目」發表  
民國 91 (2002) 年 Cheng A-tsai (鄭阿財)、Provenance and verification of Dunhuang manuscripts in Taiwan, *Dunhuang Manuscript Forgeries*, The British Library が、傳圖コレクションの存在に言及  
3 月 「傳圖藏『敦煌文獻』出版會議」開催  
12 月 IDP と協定締結  
民國 92 (2003) 年 寫本整理開始  
民國 93 (2004) 年 デジタル化完了、IDP にデジタル畫像と後設資料 (metadata) を提出  
民國 94 (2005) 年 Web 公開

[付記 1] 拙稿で取り上げた資料の閲覽にあたっては、各所藏機關と關係各位に格別のご高配を賜った。特に、傅斯年圖書館の會冠雄氏、歷史語言研究所の劉淑芬氏、楊峻峰氏、京都國立博物館の赤尾榮慶氏、紹介の勞を執ってくださった高田時雄氏に感謝申し上げる。

[付記 2] 本研究は、平成 18 年度科學研究費補助金「若手 (B)」による成果の一部である。

<sup>80</sup> 卷首に民國 14 (1925) 年の序を持つが、實際の刊行年は明らかでない。今は、1991 年景印本に「中華民國二十至二十一年出版」とあるのにしたがった。

<sup>81</sup> 史語所の移轉經歷は、『中央研究院歷史語言研究所簡介』(中央研究院歷史語言研究所、2002 年)を参考にした。